仮面ライダークラーロ

コンテンダー。

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

運命と言うものはいつもきまぐれだ。

世界が動いている中、この運命も転がっていく。

都会の闇に人の欲望が形をなした怪物が暗躍する。彼らもまた運命と言うサイコロを手にした人間が姿を変える怪人『アセンブル』。

今日もどこかで罪が産まれる。

そんな闇を切り裂く運命のダイス。

紅き仮面のルチャドールが空を舞う。

その名はーー

仮面ライダークラーロ。

さあ、楽しもうぜ！

目次

Round0 ―――― 1
登場人物&仮面ライダー紹介 ―――― 8
Round1 灼熱のルチャドール① ―――― 15
Round1 灼熱のルチャドール② ―――― 21
Round1 灼熱のルチャドール③ ―――― 26
Round1 灼熱のルチャドール④ ―――― 34
Round2 咎人は焔に、狼牙は月に ―――― 40

Round0

「やあ、始めまして」

白衣を羽織った青年は本を片手に椅子に座る。高級そうなその椅子に深々と座り、静かな口調で話し始める。

「ここに1つの物語がある。運命と言う賭けを楽しむ青年とその世界を彩る戦いの話………。なんと面白く、なんと読めないものだろうか」

本を閉じた青年は静かに微笑みながら、白衣のポケットからサイコロを取り出すと眺めながら再び口を開く。

「例えばこのダイス。どの数に止まるか、どの数を出すかは意図して転がさない限り予測はつかない」

何を言いたいのだろうか、ここで青年は焦らすように首を振る。

「………気になっているみたい、だな。俺はこの物語を観測している『キーパー』みたいなモノさ。云わば記録者。云わば傍観者。物語風で言えば語り部、か」

指を立てて青年は笑う。その笑みには全ての意味なぞない。そこにあるのは関心と義務。

「長々と話してしまったか………。さあてそろそろ始めるとしようか、運命のダイスが転がる先の『物語』を」

再び本を開いた青年はそれをこちらに向けている。すると周囲の世界は歪み物語の扉が開く。

『ああ、最後に………俺は文臣（フミオミ）。詳しくなんて言うつもりはないし、語るつもりもない。ただの黒子さ』

彼の言葉はここで途切れた。もう世界は、運命の先に辿り着いたーー。

――――――――――――――――――――――――――

大都市・東京の中心地に大きなキャンパスを構える大学がある。

桜を始めとする四季の花の弁を型どり1つの花1輪と包む川の流

れの校章が光る私立大学『東彩大学』。
数年前にこのキャンパスを開いて以降、入学希望者も増えた。
あちらこちらに学生が楽しげにキャンパス内の石畳の上を歩く。その響く足音は何重にも重なり合う。
そんな学生達とは異なる二人の男がベンチに座りやり取りを行っていた。
「ふうん、なんとかなったんだ」
白毛混じりのボサボサの髪を撫でるように触るスーツ姿の中性的な顔立ちの青年。興味は無さそうに話してはいるが、もう一人の話を引き出そうと深いニュアンスを込めた一言を置く。そして一息に終着点まで話を持っていく。
「ま、宙夢のおかげで噂の大本は断ち切れたし、様々だね」
軽い相槌と穏やかな笑みでもう一人の青年の労を労った。
それが効いたのかは分からないが渋い顔をしていた青年は表情を崩す。少しばかり複雑なのか、はたまた返答するのが億劫なのか。
「様々って……。俺しかやってねえから当たり前だ、全く人使いが荒いのなんの。俺は引き受けてやってんだ、少しぐらいはギブを増やせよ」
立ち上がり口を開く青年。それと同時に出るわ、出るわの文句の山。灰色のカーゴパンツの太股のポケットに手を突っ込んだままのその口振りはひねくれているとしか言いようがない。
「それぐらい喰いかかって来ないと宙夢らしくないや。それがいい」
その青年の態度にいたって満足したのか、スーツ姿の青年も首をうんと上下に1度振った。
「人をおちょくって。ああっ、楽しめねーぜ」
真上を向き、大きなリアクションを見せる青年。このリアクションの対比が二人の関係性を際立たせているのかも知れない。
白髪混じりのスーツを着た青年の名は楯山英俊（タテヤマエイシュン）。東彩大学の中で一番若い教鞭者、つまり准教授だ。
専門は犯罪心理学。その道では天才と呼ばれている。その一方でとある『犯罪』の解決役の窓口として警察を始め、多くの人脈を持っ

ている。
　その『犯罪』を解決するのは英俊ではなく、オーバーなアクションをしている赤いテーラードジャケットを着た派手目な彼だ。
「で、また俺を呼び出したのには理由があるんだろ？どうせ新しい『アセンブル』の話だろ。分かってんだよ、面倒なんだよ！んな事は簡易に済ませ！」
　口悪く再び文句を吐き出す、この青年がだ。
「まあまあ。でもさ、呼んでも呼ばなくてもしっかり報告に来るのは知ってるんだよ？」
　青年の本質を知る英俊は正直じゃないなあ、と言わんばかりの顔で的確に図星をつく。
　さらりと指摘して来るのがシャクに触ったのか青年はぐっと歯を噛み合わせてやられた、と言いたげに顔を背けた。そして小さく息を吐いた。
「そんな訳ねえ！ここに来るのは気まぐれなんだよ！……たく」
　明らかにトーンダウンし、再び英俊の隣にドスンと腰を下ろす青年。
　改めて青年を紹介しよう。これまで英俊から宙夢と呼ばれてきた彼こそとある『犯罪』に対して対処するスペシャリスト。
　英俊の中学からの付き合いの東賀　宙夢（トウガ　ヒロム）だ。
　目付きが鋭く美しい鳶色の瞳と黒がかった茶色の髪を左側にたらし、わざと眼を隠すようにしているのだが、どう見ても見なくても最初の印象は悪い。
　まあ、先ほどの会話からも分かる通り扱いやすくて扱いにくいヤツなのだ。
「で、今度のアセンブルはどんなヤツなんだ？」
　英俊の切り出しを待つことなく宙夢から口火を切る。気になっているのにこうでもしないと友人に手玉にとられるのが目に見えているからだ。
　ところが英俊は知っていると目で訴えかけながら、人差し指をピンと立てて一呼吸を置かせた。

「はい、主導権は取らせないよ。今回の『アセンブル』犯罪はちょっと面倒かもね。申し訳ないけどあまり情報がないんだ」
「……面倒？」
すっかり立場を元に戻されペースを握られる宙夢。
しかしながら、アセンブル犯罪とは何か。
「うん、警察も手をあげていてね。それ由来で僕のほうに来たんだ。最近話題でしょ？」
英俊は話しながら尻に引いていた新聞を見せる。
ー消えた現金ー
ー現金輸送車から２０００万消失、同一犯かー
まるでマジックなのか、と問いたくなるような見出し。次々と現金が消える強奪事件のことを指しているようだ。
「なるほどな……」
宙夢は英俊の新聞をむしり取り頭を回転させる。
「分かった。色々始めてみる……。お前も頼むぞ」
力がなかった瞳に火が灯ったように宙夢は英俊の肩をトンと叩いて去っていこうとした。
「分かってるよ、宙夢。あ、あんまり伊織を巻き込むんじゃないよ？」
その背中に頼もしさが見える中、英俊は宙夢に釘を刺す。よく彼に引っ張り出される後輩の名前を。
「……考えておく。さ、楽しもうか」
間をあけて返答した宙夢はそそくさと踵を返して去っていった。
「あれは……無理だな」
そう断定できるあたり分かりやすい。英俊はらしい彼の背中を見送りながらベンチから腰をあげた。
そして、スマートフォンを取り出すとある映像を開いた。
それは投稿された映像。
ある夜に撮影されたモノだ。
漆黒の闇の中、赤い光が浮かび上がる。それはくるりくるりと反時計回りに同じ速度で回っている。
赤い光を追うように闇から微かにメッキのような煌めきが見える。

まるで赤い光を追いかけるように、そのメッキの煌めきは一気に距離をつめていく。
『仮面ライダーッ！俺の邪魔をするなあああああああっ！』
野太い声が響き渡る。それは赤い光ではなく、鈍色のメッキから発せられていた。
徐々に闇が消え、薄暗い光がそのメッキを照らす。
カマキリのような鋭い鎌を持ち合わせたスラリとした機械のような輝きと、人間の動き。
これはまるで『人間』が『機械の装甲』を装着したような、変身ヒーローのような存在だ。
その装甲人間は赤い光を切り裂こうとしていた。狩りを楽しむのか、はたまた狩られるのか。先ほどの野太い声を思い返せば焦りを隠せないのではないか。
つまり、狩られるのは装甲人間。
「よっ！はっ！」
そして、淡い光は赤い光の主を眼下に現した。
反時計回りのハンドスプリング式の側転を鮮やかに繰り返す姿はまるで体操選手。
だが、それは違う。その動きとは裏腹に『マスク』をつけた姿はまさにプロレスラー。
この動きからしてメキシコ仕込みのルチャドール。
マスクのみがうまく照らされると、そのマスクは赤い不死鳥が羽根を広げたような形の物になり、羽根の中心部が複眼と重なっている。頭の中心には炎型のエンブレムがある。
マスク＝仮面。人は彼をこう噂する、仮面ライダーと。
「ハッ！」
すると、仮面ライダーはガードレールをまるでロープのように使い、側転の勢いそのままに前に返る。
『な、何ッ!?』
予想外の動きに一瞬の隙が出来る装甲人間。
「おらよっ！」

そこで仮面ライダーは軽くジャンプし、磨きあげた左の蹴りを装甲人間の脛椎に叩き込んだ。
『ぐあっ!?』
脛椎への衝撃は装甲を突き破り中まで響く。この一撃で意識とバランスが飛ぶ。
グラリとバランスを崩した装甲人間は前のめりに膝をつく。
「フッ!突き抜けろォ!」
まるでそれを待ち構えていたように先に地面に足をつけた仮面ライダーの左膝が顎の位置を捉えた。
そして、炎をまとった右膝が顎を蹴り上げた。
鮮やかな二段膝蹴り。仮面ライダーの得意技『フレイムアウト』だ。
『グハアアアアッ!?』顎を蹴りあげられた衝撃で真後ろに吹っ飛び、装甲人間は何度も地面に叩き付けられる。

「楽しませて貰ったぜ?あとはムショで夢を見な」
仮面ライダーはさらばとそのまま踵を返す。
ーパキイイイイン!ー
踵を返したのと同時に小さな破裂音と何かが砕ける音がし、装甲人間が倒れた場所には粉々になったダイスと意識を失った男だけが倒れていた。

ここで映像は途切れた。
英俊は仮面ライダーの背中と、宙夢の背中を頭の中で1つに重ねていた。
「仮面ライダー……クラーロ。宙夢、また世話をかけるね」
仮面ライダー／東賀宙夢の物語はーー幕を開けたーー。

仮面ライダークラーローKAMENRIDERCLAROー

登場人物＆仮面ライダー紹介

東賀　宙夢（トウガ　ヒロム）／仮面ライダークラーロ
今作の主人公。
年齢　２６歳。
目付きが鋭く美しい鳶色の瞳と黒がかった茶色の髪を左側にたらし、わざと眼を隠すようにしている。また少し背が低く、足は長い。
いつも灰色か、深緑のカーゴパンツと縦縞のＹシャツに背広仕立てのテーラードジャケットを（白、黒、青、赤、緑を何着も持っている）羽織っている。
性格は少しひねくれた部分を見せる事が多く、口の悪さが垣間見える。だが、なんやかんや言っても人付き合いは良い。
人生「さあ、楽しもうぜ！」がモットー。
今はフィールドワークを生業とする写真家で、かつギャンブルで稼ぐギャンブラーを仕事としている。が、裏では仮面ライダーとしての仕事も行っている。趣味とシリアスを謳歌している。
過去には格闘家としてリングに立っていた。だが友人に対する負い目からリングから去り思うままに過ごしている。
ファントムダイスを手にしたのは格闘家を辞めてからであるが、持ち前の格闘センスで持ち込まれた仕事をこなしている。
楯山　英俊（タテヤマ　エイシュン）
相棒。宙夢の中学時代からの友人で、東彩大学で若手ながら教鞭を振るう犯罪心理学者。
白髪混じりのボサボサの髪とは対照的にファンの多い中性的な顔立ちとスラリとしたスタイル。
宙夢に『仕事』を振るのは彼の役割であり、影で出回る『アセンブル』柄みの依頼をよく受けている。
佐倉　伊織（サクラ　イオリ）
２３歳。メインヒロイン。
長い黒髪を束ねてポニーテールにしており、アジアンとヨーロッパの中間の顔立ちをしている所謂美人。性格もかなり勝ち気でぐいぐ

い来る一方で乙女チックで、弱い部分もある。
現在の仕事は探偵事務所の駆け出し探偵だが、宙夢に引っ張り回されるためほぼ在籍の意味がない。
なんやかんや言いつつも英俊の代わりとなり、宙夢とは掛け合いをする事がお馴染みになっている。
平田　淳（ヒラタ　ジュン）
宙夢達の集まるビリヤードバーのオーナーで、凄腕のプロプレイヤー。
長身で瞳は大きく優しさが感じられるが、ちょっと大正感がある服装をしている。
経営者としても優秀で、それ故か飄々とした性格の一方で、一本芯の通った面倒見の良さがあり兄貴分として彼らを見守っている。
月村　有栖（ツキムラ　アリス）
天才美少女小説家と自ら名乗る赤毛のボブカットと紅い瞳が美しい１９歳の学生。いつも活発なのか、ショートパンツとニーソを着ている。
英俊の教え子で格闘家時代の宙夢の大ファンでミーハーのように追いかけ回すのと同時に彼の仕事を記録することもしている。
だが、それだけではなく運動神経はずば抜けており宙夢に憧れて磨いた蹴りで敵をなぎ倒していくことも多々ある。
佐倉　正道（サクラマサミチ）
２９歳。警視庁捜査１課に編成された特別班に所属する警視正。超エリートでありながら不可思議な犯罪の時に指揮を執る。仮面ライダーのことは知っておりよく情報のやり取りと戦線を張る。
伊織の兄であり、宙夢の理解者。
大狼　哲弥（オオガミ　テツヤ）／仮面ライダーバイト
金髪に黒いキャップ（キャップにはスペイン語で狼の意をもつ『ｓｏｌｉｔａｒｉｏ』）を被った黒いパーカーとダメージシーンズを合わせたファッションをした黒目の青年。
２４歳。非常に真っ向かと思わせて、くせ者。でもやっぱり真っ向な性格で毒も吐けば、優しさも見せる。どうやら何か手に職をつけて

いるが不明。
小ネタとしてファミレス好きで相当いる。
彼もまた、仮面ライダーである、らしい。
藤堂　龍馬（トウドウ　リュウマ）／バジリスク・アセンブル
機械分野で急成長している『オメガ工学』にて、社長として君臨している天才。世界に技術力を発信し、今では財界にも一目を置かれている。
黒髪で眼はゆらりと細く、手足も長い。いつも燕尾服を元にした白いスーツを着て身なりを整えているが、蓋を開けるとプライドが高く、性格も何処か歪んでいる。
自ら『グロリア』と言う組織を作り、オメガ工学の看板の裏、人体実験をも厭わないところにもその歪みは出ており、バイヤーを介して作り出した『ゲノムダイス』による犯罪を増長している。
自らもゲノムダイスを使用し、バジリスク・アセンブルに変身する。
黒埼　彰人（クロサキ　アキヒト）／シャドウマン・アセンブル
オメガ工学に席を置いてはいないが、藤堂の許可を得て様々な開発を行っている科学者にして、ゲノムダイスの秘密を握る男。
アロハ、サングラス、白衣と怪しい風貌だが間違いなく利己的で、頭が切れる。
グロリアの幹部として、バイヤー達にも指示を出しているようだ。
リゼロッド・アサンブラシュ
藤堂の秘書を勤めているハーフ。
腰まで伸びた金髪と目元の黒子、胸を強調するリクルートスーツとかなりセクシーで大人っぽい。だが、クールではあるが意外にもボロを出す。
グロリアに属しているが、ダイスを巡っては藤堂と黒埼の方向には反対しており、宙夢達と無断で接触するのもしばしば。
一応フェアリーダイスを持っているが、滅多には変身しない。
スカル／アームド・アセンブル
藤堂が最も信頼しているバイヤーで、与えられたコードネームを名乗る銀髪の男。

唯一バイヤーで幹部として君臨しており、仮面ライダーやルールを守らないものとと戦闘をする組織のお目付け役でもある。
そのわりにはソンブレロとメキシカン風のコートを羽織っているため、怪しさもある。
アームドダイスでアームド・アセンブルに変身する。
仮面ライダー紹介
仮面ライダークラーロ
変身者　東賀　宙夢
使用アイテム　ファントムダイス＆マッチドライバー
ファントムダイス……　かつて幻想種と呼ばれる神話に描かれた生物の記憶を宿した不思議なサイコロ。一の目を押し込むことで展開し、サイコロに封印された幻想種の形状に変形する、この形状をロストパッケージと言う。
ダイスを展開すると、音声がなる。
《Ｓｗｉｔｃｈｕｐ！》
マッチドライバー……展開したファントムダイス・ロストパッケージの力を解放し、身に纏うためのベルト。形状は黒いスマートな形だが、中央にルーレットのような回転式の７色にカラーリングされた歯車があり、左端にダイス装填ユニット、右側にツマミがある。下の土台には不死鳥と龍が絡み合う絵柄がある。
ユニットにダイスを装填し、ツマミ（トリガー）を回すことで歯車が回転、それによってダイスの力を解放する。
ダイスをベルトに装填すると音声がなり、変身音も鳴る。
ダイス装填
《ｄａｉｓ　ｓｅｔ！〇〇〇！》
変身音
《Ｇｅｔｕｐ！（各フォーム音声）！〇〇〇・オブ・スタイル！》
必殺技……ツマミを回して作動。ルーレットを回す回数で技が変わる。
一度回すと《Ｓｔｒｉｋｅ　ｈｏｌｄ》、二回回すと《Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｈｏｌｄ》三回以上で必殺の《Ｆｉｎｉｓｈ　ｈｏｌｄ！》

各フォーム

宙夢の変身するクラーロは変幻自在にダイスを変更することで戦い方を代える。

またクラーロとはスペイン語で『鮮やか』と言う意味がある。

仮面ライダークラーロ・スタンバイファイター

灰色のカラーリングの装甲なしの『待機形態』全身黒でマスクものっぺらぼうに近いが、唯一黄色の複眼のみある。これはベルトのみの姿のため、ファントムダイスの力がなければポテンシャルを発揮できない仕組みである。

仮面ライダークラーロ・ブレイズファイター

仮面ライダークラーロの基本形態でフェニックスダイスを装填し、変身した姿。

マスクは赤い不死鳥が羽根を広げたような形の物になり、羽根の中心部が複眼と重なっている。頭の中心には炎型のエンブレムがある。

また灰色のボディに纏うのは赤い装甲。胸から腹部にかけて燃え上がる火柱が上下鏡のように描かれ、胸の炎は不死鳥の羽根のようになり、火と火の間に銀のラインが入っている。脚も炎型のレッグアーマーを膝下両足に纏っている。

また肩当ては左に展開したフェニックスダイスが肩当てとして装着されている。

戦闘スタイルは基本的な格闘、特に磨いた足技と投げ技を中心に組み立てるスピード感溢れる戦いを見せる。また、翔んだり跳ねたり、華麗な空中殺法を使用するルチャドール式を得意とする。

必殺技は身体を反転させて飛び上がり、ムーンサルトの形で踵落とし。そこから反動で舞い上がり炎を纏った回転真空蹴りを繰り出す『フレイアベンダバール』

仮面ライダークラーロ・ストリームファイター

リヴァイアサンダイスによって変身した蒼いフォーム。

マスクはリヴァイアサン、つまりドラゴンモチーフで龍が口をあけて咆哮をあげているような形になっており、二本の触覚がある。額に

は水と言う漢字を崩したようなエンブレムがある。
アーマーは龍のボディをモチーフにした蒼と黒が混ざりあう色合いで腹部をに龍の鱗のような飾りがほどこされている。また、胸は龍の水を泳ぐ横向きの姿がエンブレムとして刻まれ、右肩に龍の頭が肩当てとしてある。
水と冷気を生かした変幻自在のパワーファイターであり豪快に敵をなぎ倒す。とクラーロ専用武器である三つの武器のうち、氷を宿した大剣『グレイシアルエッジ』を使用し戦う。さらに間接技も操る。
グレイシアルエッジ……氷をモチーフした大剣。氷柱と割れた氷のような歪な形と刃が真っ白なのが特徴で、斬ると言うよりも強引に捩じ伏せるためのような剣である。江にダイススロットがあり、ダイスに合った一撃を繰り出せる。
必殺技は水柱を呼び出し高く上昇。グレイシアルエッジの必殺で水柱を凍結させ、レールを作りそれを滑って繰り出すドロップキック『グラシアールムエルタ』
仮面ライダークラーロ・ビエントファイター
ペガサスダイスによって変身した白の形態。
マスクはペガサスモチーフ。競走馬につける『メンコ』と仮面を合わせたような感じの白に黒のラインが入ったマスク。頭には角がある。
アーマーのカラーリングは白と黒のラインが特徴。２つのフォームよりもシンプルで腹部の飾りはなく胸のアーマーが右が流れる風と左が竜巻になっており、そのまま肩当てにも活かされている。それに合わせて側面に白と黒のラインが入る。レッグアーマーは竜巻モチーフである。また、首に赤いマフラーを巻いている。
主にスピードに乗ったリズムの速い戦いを得意にする。また、専用武器のルーレットリガーによる射撃戦を得意とする。
ルーレットリガー……ビエントファイター専用のルーレットと銃が合体した武器。ルーレットを回す事で弾薬を装填する。また、ツマミで矢印をルーレットの絵柄に合わせると様々な弾丸を発射する。『赤……マグナムなど』また、ダイススロットがありルーレットリガー

単体の必殺技も使用できる。
必殺技はルーレットリガーのルーレットを高速回転させ、風のエネルギーを様々な弾丸に変化させ雨のように降らせる『バレットテンペスター』
仮面ライダークラーロ・レランバゴファイター
クラーケンダイスを使用して変身する雷の力を持つ黄色と白の形態。
クラーケンとは伝説の大烏賊モチーフの幻想種である。
マスクはクラーケンの頭の三角が三日月のように開き、それが黄色の複眼にゴーグルのように被っており、頭の触覚は鋭い突起になっている。また左のゴーグルの端は雷のようなギザギザになっている。外側は黄色と白がハーフでカラーリングされている。
また胸のアーマーには雷と烏賊の足が中央で重なり、かつ交互に2つずつデザインされており、雷が黄色、足が白になっている。　また肩当ては両方とも電気プラグのような形になっている。
ベルトにかけての腹部のアーマーは足をイメージした黄色のロープがあり、両足には雷の紋章が刻まれている。
戦闘スタイルは専用の槍　『デルタード』に電気をまとい、それを軸にしたトリッキーかつ、テクニカルな臨機応変の戦いを得意にする。また、技をさばくことに長けている。
デルタード……箱型の巨大なダイスを変形させて使う槍。先が雷のようなジグザグになっており、臨機応変に槍の取っ手を押し込む事でナギナタ、マジックハンドに変形する。
必殺技は雷をクラーケンの足のようにデルタードに巻き付け、敵を何度も切り裂く『センテレオコルタール』

Ｒｏｕｎｄ１　灼熱のルチャドール①

東京は多彩な街だ。新宿、池袋、渋谷などの都市前とした機能を持つ大きな街や浅草や柴又などの下町を残した街もある。
文化が多彩故に集まる人間も多彩になるのだろうか。
首都であることも要因の１つなのは外せない。
そんな事を頭の中で考えながらも、新宿のキャンパスから下町の空気が根強い東京湾に近いエリアにやってきた宙夢。
「……」
炎をデザインし、かつ翼を全体にあしらった赤いボディのバイクを古いビルの真下に止めた宙夢はヘルメットを脱ぐと、３Ｆの年期の入った看板を見上げた。
「相変わらずボロっちいな、蘭子の事務所」
３Ｆの看板には達筆な文字でこう刻まれていた。
ー神津法律探偵事務所ーと。
法律、弁護士？それとも探偵なのか？今一つどちらつかずな印象を看板から受けてしまう事に珍しく愛想笑いする宙夢であった。
が、見慣れた光景故にいつもの事だと頭の中で処理をして、ヘルメットをバイクの後ろに引っ掻けて軋む薄汚れたガラス戸を引いて中に入る。
古いビル故、石の階段も欠けていたりひび割れがあったりしているのはそれだけ古い建物であるのを示していた。それだけではなく、壁紙も捲れてよどんでいる。
もうこの建物はレア物と言っても差し支えない。
カツ、カツ、カツ。そんな古い建物内でわざとらしく足音を立てながら、一つ一つの石の階段を昇っていく。
すると、２Ｆの踊り場で仁王立ちしてこちらを見下ろしている女性がいた。
「またなんですか、いえ、またなの？宙夢先輩。こちらだって蘭子先輩がいない分をカバーしないといけないんですから付き合っている暇はないんです！」

強気に文句を投げてくる声の先は先ほどの女性。　長い黒髪を束ねてポニーテールにしており、アジアンとヨーロッパの中間の顔立ちをしている所謂美人だ。
しかもスタイルも良い。
そのバランスの良さが勝ち気の強さにピタリと当てはまる。
「お、お出迎えとは……これは光栄だね。伊織（イオリ）」
なんやかんやでいつも出迎えてくれる彼女に英俊の時とは違う物言いを見せる宙夢。女性でこういう砕けた付き合いをしているのは数人しかいない。
その中の一人である彼女。
この神津法律探偵事務所の見習い職員で、宙夢のパレハ（パートナー）の一人である佐倉　伊織（サクライオリ）である。
「出迎えではありませんから、お断りですから！」
宙夢の発言に反論をぶつけてくる伊織ではあるが、そんな事は知らんと言った顔で宙夢が口を開く。
「や、俺の指示は蘭子の指示と同じだから。悪いけどな、そういう話をつけてるんだよ」
「はい？聞いたことないです。暴論です！」
「うっせえな……分かった、分かった！後なんか奢るから」
「……も、モノになんて屈しませんから」
伊織の気持ちが若干揺らいだ事を見逃さず、宙夢は問答無用で手を引く。
「ほら、行くからな。ほら！」
「ああ、もうっ！仕方なくですからね！……先輩、またです……」
伊織は宙夢のひねくれた協力要請を撥ね付けられずにそのまま階段を降りていった。
一応宙夢はこうやっていつも体制を組み立てていくのであった――。

――――――――――――――――――――――――

―同時刻・幹線道路から外れた裏手の通り―

裏手にある銀行の搬出口で現金の詰め込みが密やかに行われていた。
「よし、何事もなく完了か」
「最近の件があったし、心配してましたけど良かったすね」
二人のガードマンが銀行職員が扉を閉める中、運搬車の中で談笑をしていた。
「何が手品だ、手品なんてトリックがあるに決まってるしな」
「そうすね」
乾いた笑い声が響く中、車のエンジンを回し、銀行から離れた瞬間だった。
グラリと車体が大きく揺れた。激しい音はないが車体に何かが突き刺さった感覚だ。その衝撃で車輪が空転している。
「な、この揺れ!?」
「じ、地震!?」
だが、周りは揺れていない。揺れているのは車体のみ。
「おい、連絡!」
「は、は、はい!うわわわっ!?」
何かが起きている。すっかり落ち着きを失った二人は連絡を取ろうとするが、慌てて無線が手につかない。
「ッ!見てくる!落ち着いて、連絡を!」
「せ、先輩!?ちょっ!?先輩!」
このままでは埒が空かないと思ったのか、運転手役のガードマンが何が起きているのかを調べるために外に飛び出した。
「こっ、これはっ!?」
見たこともない光景に驚き、目を丸くするガードマン。それは必然やかも知れない。
頑丈なはずの運搬車の真横に穴が開き、そこから次々と札束の入ったケースが『消えて』いっているのだから。
いや、消えると言うのは間違いだ。
穴を通してアタッシュケースが生き物のように飛びながら、穴を通ると姿を消す。

さながら見えない何者かに収納されているようだ。
「ッ！」
思わず非常時のために持っている拳銃をホルスターから抜き、穴に向ける。
「……ハッ、ハッ、ハッ……ッ！」
ズッン！と慣れないながらも銃口から弾丸が一撃飛んでいく。重い反動が体に響くがそんなのには構っていられない。
ただどうにかしなければの一点でガードマンは一撃を撃ち込んだのだ。
『……ああ、バレちゃったか……。まさかこんなに簡単に化けの皮が剥がれるとはね』
穴に弾丸が突き抜けようかとした微か前で、弾は透明な硬いモノに衝突したのだ。からりんと落ちた薬莢と低い声が物語る事実だ。
見えなかったモノは徐々に姿を見せる。
徐々に透明だったボディが運搬車の荷台に合わせた銀から、メタリックのかかった黒に変化し、足のメタリックグリーンも見えてくる。
「か、怪人!?う、噂の……」
ガードマンは噂に聞いていた怪物の名前を思い出していた。
不可思議な犯罪を引き起こす存在。人間が装甲を纏い変身すると言う怪人ーアセンブル。
きっと今目にしているのは、アセンブルなんだと確信したガードマンは腰を抜かして座り込んだ。
「先輩、大丈夫で……か、怪人だあああああああっ！」
あまりにも遅く、先ほどの音がだめ押しになったのか、運転手のガードマンがやって来て悲鳴を上げた。
『五月蝿い……騒がれたらやりずらくなっちゃうなあ……』
荷台に張り付いたアセンブルの姿が完全に露になった。
メタリックブラックとメタリックグリーンが所々に混ざりあった身体と背中に背負った丸い貯金箱のようなタンク。顔はカメレオンがモチーフ。

連続輸送車金消滅事件の犯人『バンクス・アセンブル』だ。

『ここまで上手く事を運べていたのに………。ま、一人も二人も片付けてしまえば同じ部類だよね』

ついに狂気を見せつけたバンクス・アセンブルは長いカメレオン特有の舌をだらりんと伸ばし、二人のガードマンの胴体を縛り上げた。

「がっ!?」

「があああああああああっ!?」

一瞬の出来事で対処できなかった二人の腹部と骨に同時に痛みが襲いかかる。

圧迫と骨の軋み。２つの痛みが神経を徐々に乱していく。

「があああああああああっ…………」

同じような悲鳴をあげていた二人の身体が力を失っていった。

そして、グチャリグチャリ内臓が、心臓が、血管が、潰されていく。

バキリバキリと骨が砕けていく。

もはや助かる術など無かった。

この日、連続運搬車金消滅、いや強奪事件で初めての被害者が出たのだった――。

――――――――――――――――――――

―素晴らしい商品です。うちでも是非導入させていただきたい―

「ありがとうございます、それでは契約はアポを取らせていただいてと言う形で」

強請な社長室だろうか、大きなモニターを通して契約を取り付けた白いスーツの男。

この男が社長を勤める『オメガ工学』は新進気鋭の多ジャンルの工学分野でトップを走る会社だ。

「………フン、下手に出るのはどうも好きになれん」

先ほどの爽やかな笑顔とは全く異なる冷めた表情を浮かべた男、藤堂　龍馬（トウドウ　リュウマ）は手元のダイスを手に取り、つまらなさそうに手の中で転がし始めた。

「面白い話は無いものか………。バンクスのダイスはなかなか見処が

ありそうだが……」
藤堂の視線の先にはーー何がある？
きっと彼の目線の先にあるものはー栄光にして、軌跡の形。
「社長、お時間です。次の予定が入っております」
とそこに秘書らしきグラマラスで美しいと言う形容がピタリと合う女性が現れた。
「……そんな時間か……リゼ、バンクスのチェックを欠かさずにおこなってくれたまえ」
藤堂の指示にリゼと呼ばれた秘書は軽く頭を下げる。
「かしこまりました……。スカルに注意をさせます」
「ならばよろしい。アッハハハハハハッ！」
高らかに笑いながら社長室を後にする藤堂の背中をリゼは複雑そうに見送った。
「……藤堂社長……一体どこまで行くつもりなのですか？」
リゼ改め、藤堂の秘書であるリゼロッド・アサンブラシュは狂い続ける社長の背中を見て何を思うのだろう。
静かにスマホを取り出すと、手早く文字を打ち込みある手配を進めるのであった。
その連絡先には、ある大学の准教授の名前があったのを最後に付け加えておこうーー。

Ｒｏｕｎｄ１　灼熱のルチャドール②

ー遺体が見つかったってー
ー真っ二つになっていたんだって、怖いなー
ーしかも、バケモノがいたとか……ー
ーお金もやっぱりやられていたんだとー
ーこれも連続消滅事件の犯人かしらー
昼下がりのオフィス街、裏手へと入る通りの周りを野次馬が取り囲む。
それだけでも異常な光景だが通り事態がロープと立ち入り禁止のテープで封鎖された挙げ句、ブルーシートで見えないようにシャットアウトが施されていた。
「……そこの写真を……こまなく調べて。細かな傷も確認」
その悲惨な現場の人動指揮をとっている若い刑事は細かい情報を頭で整理しながら、上手く立ち回っていた。
そこへだ。刑事の電話が鳴った。
「すまない、席を外す、長くなるかもしれない。指揮を代わりに」
「は、はい」
隣にいたベテラン刑事に指示の件を伝え、若い刑事は一旦そこから離れて、連絡を受ける。
『兄さん、今大丈夫かしら？』
「…ああ、大丈夫だよ。伊織」
その刑事の連絡の相手はなんと佐倉伊織だったのだ。少しばかり口調も柔らかくなる刑事。
「宙夢君はそこにいる？」
『ええ、代わるつもりで連絡したの。宙夢先輩、はい』
電話口の向こうで音が遠くなる。受け渡しでもしているのだろう。
『あい、東賀宙夢です』
連絡先が面倒そうな声に代わる。伊織と共にいる宙夢だ。
「……宙夢、輸送車がやられた」

宙夢の挨拶に頭を抱えながら刑事は話を切り出していく。
『で、今現場と。ま、騒ぎになってるから分かるよ。で、指揮を取るのはお前なんだな、そうなんだな。俺も英俊の話を聞いてから伊織と一緒に現場を見て回ってる』
今、宙夢達は何件か連続で起きているバンクス・アセンブルによって引き起こされた事件の現場を見て回っていたようだ。
だが、相変わらず話の腰を折らないペースで喋ってくる。それは慣れたと動じない刑事。さらに宙夢は現場を見て回っていることを踏まえてさらに続けてきた。
『しかし、どこもちょうどいいぐらいに裏手だな。まるで光に当たるのが嫌なのかな』
『うん、宙夢先輩の言うことも一理ありますね』
宙夢は現場を見ていくうちに襲われたポイントが裏手や影の多い、ビルの谷間での襲撃が多いのではと言う仮説を立てているようだ。
だが、案外外れとは言いにくい。
刑事が振り替えると確かに今回の事件が起きた裏手も丁度、ビル影が重なる地点だと言うことがわかる。
「うん、確かに今回のポイントもそうだ。今までと同じように影が多い。しかし、何故影なんだ？」
刑事が不思議に思うのも間違いではない。確かに『影』と言う共通項はあるが、それがどんなポイントになっているかが分からない。だが、偶然と片付けるのもナンセンスだ。
『……いや、これは俺の勘なんですがね、影は重要なキーポイントなんじゃないですか？』
今までのやる気のない声のハリが宙夢らしからぬ丁重な言葉使いに代わると同時にかちりと締まる。
「キーポイント？」
『ええ。光によって身体が目立ってしまうと犯行がしにくくなる、のでは？』
カメレオンは身体を周りの色に変色させる能力があるのは有名な話だ。

だが、光によっても身体の色が変わる事がある。
光が強い場所では緑に、影だと焦茶になどだ。
もしカメレオンの生態を今回の犯人に当てはめるならば、犯行をカモフラージュすると同時に自らの身体を影に溶け込ませることが大切だ。
宙夢が考えたのは光が強すぎると、身体の色をコントロール出来ないのではないかーーと言う結論だ。
「…………それは伊織の言う通り一理ある。分かった、この件を少し踏まえてみよう。被害者も出てしまった以上、後出には出来ないッ！」
宙夢に背中を押される形で刑事はある捜査を思い付いた。ならばやってみようか、と言わんばかりに。
そして、若き指揮官である刑事、佐倉　正道（サクラ　マサミチ）は現場に戻っていったーー。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「切れたッ！んだよ、正道のヤツ」
その頃、初めの消失があった路地裏の道路に大の字で転がっている宙夢がいた。
「宙夢先輩、いきなり寝ないでください！恥ずかしいです！電話が切れたからって駄々を捏ねないで！」
人目はないとは言え、一応の。いや、それ以上の宙夢のモラルの無さに強く言いつける伊織。
「駄々は捏ねてない。ちょっとイラッとしただけだ」
イラッとして大の字なんぞ聞いた事はないのだが、お構いなしだとばかりにすぐに宙夢は立ち上がるとポンポンと背中を叩き、土を祓う。
「……………なら、なんで大の字になったんですか？」
今更ながら伊織にもよく宙夢が良く分からなくなった。これでよくコンビを組んでいられると自分で自分を褒めてあげたい。
「頭の整理と周りの目を気にすることとどちらが大切か？今起きている

事件の前じゃ、そんなのは気にすることじゃないな」
宙夢は屁理屈ともとれるような、破天荒のような、なんとも分からない言い分を伊織にぶつける。
「分かりましたから！分かりましたから！……ッ、もう……」
宙夢のペースに振り回されながらも、なんやかんや言いながらも付き合ってしまう自分にため息をついてしまう。
だが、伊織は宙夢の態度に隠された過去を知っている。
だから、彼との付き合いを変える事が出来ない。
伊織はもう1つ知っている。今の宙夢の葛藤を。
だから、彼とのコンビを崩すわけにはいかないのだ。
「宙夢先輩、次いきますよ。ほら！」
無理矢理に宙夢を引っ張り出す伊織。分かっちゃいるけど少しは癪に触る。ここは少しでも晴らしてやろうか、鬱憤を。
「ち、分かった！分かった！行くから！」
珍しく宙夢の先手を打てたことに伊織はにんまりと笑みを溢した――。

――――――――――――――――――――――――――――――――

一時間経ち、夕刻が迫る時間になった。
宙夢達が捜査を続けている中、一人ある場所を訪れていた英俊。
「准教授、こちらです」
彼がいるのは都内にあるビリヤードバーだ。
薄暗い照明とビリヤードの台をぼんやり浮かび出させる光が絶妙にマッチしている。
一言で言えば大人の世界とでも言うのが一番照っとり早いか。
そんなビリヤードバーの中でも入り口から一番端にあり、丁度影になっている台を背にしているテーブルの方から呼ぶ声が聞こえた。
「こちらでしたか、リゼさん」
先程宙夢と会った時にボサボサだった髪出来る限りの綺麗にまとめた英俊はその声に呼ばれるまま、台に向かった。
「……お呼び立てして申し訳ありません、急用でしたので」
座っていた相手は立ち上がると丁寧に頭を下げて、英俊を迎えた。

英俊と対面しているのは金髪で秘書をイメージさせるリクルートのスーツをまとった女性。
いや、秘書だ。
彼女はリゼロッド・アサンブラシュ。
あの藤堂の秘書であった彼女が英俊と密会していたのだ。
そう、藤堂から指示を出されたあとのあの連絡受けて指定された時間にやってきたのだ。
「マスター、パイルドライバーを」
リゼに手招きされるまま、隣に座った英俊はまずは先にカクテルを注文して彼女と顔を見合わせずに話始めた。
「……事件の件ですね……しかし、いつも不思議に思うのですがどうしてあなたは……」
英俊から切り出していく。まずは嫌らしく気になることからだ。
だが、リゼは静かに笑みを称えながらも英俊の問いにこう答える。
「それはまだ聞いちゃいけないことと約束しましたよね？あまり切り込みすぎると嫌われますよ？」
「……そうでした……。貴女には貴女の訳があり、僕には僕の訳がある。その距離は守る約束ですね」
未だに踏み込めない場所。互いに決めた場所。ここが二人の交わり。
「ええ、約束です。それでは……」
英俊のグラスが届いたと同時にグラスのみを向かい合わせる。
「「乾杯」」
英俊とリゼは確認と距離を取りながら小さく乾杯をする。
「……今回の件が皮切りになりそうです」
「そうですか……」
この不思議なツーショットが何を示しているのか……そんなことは未だに分からない。
だが、これだけは言える。
仮面ライダー側と組織側の間に何らかの繋がりがあると。

Ｒｏｕｎｄ１　灼熱のルチャドール③

「囮？」
『ああ、アセンブルを引き寄せるために囮を使う』
　宙夢と伊織が事件についての相談をしていた時にあの刑事、伊織の兄である正道から連絡を受けていた。
「ああ、そう言うことか。大胆だな」
「まだ何も言ってません」
　アイスの棒をくわえながら適当に答える宙夢に伊織が流れるように訂正をいれた。
『まあまあ、伊織。宙夢、囮でアセンブルを引っ張り出した後は……』
「分かってる、分かってる」
　こんな言い方で大丈夫なのかと伊織は話を聞いていて複雑そうにするが、兄が言っているなら信じる他ない。
「でも、囮って何をするつもりで？」
　だが、そんな心配を他所に明らかにマイペースを崩さない宙夢。囮の内容を理解したわけではなかった。
「やっぱり分かってないじゃないですか」
　やっぱりかと伊織はほらっと言わんばかりに首を数回横に振り、ため息をついた。
『ま、こういう方がらしいからね』
　なんと寛容なのかと言いたくなる正道の口調。兄妹でこうも違うとは面白いものだ。
『うん、宙夢の問いに答えるなら……ダミーの輸送車を使うと言う事だ』
「ダミーの輸送車ですか？」
「それはそれで食らいついてくる可能性が低くなるかもな。もしダミーと言う事を見抜かれたら、だが。その後の手は何かある？」
　アイスの棒をさらに何度も噛みながら心配な点を指摘する宙夢。
『いやあ、それがね……。あるかどうか分からないような、分かるよ

うな、だね』
「ふうん、そんなとこ」
「兄さん、答えをたぶらかなさいで。宙夢先輩はアイスの棒をかじるのはそろそろやめた方が……」
「ん、はいはい」
伊織も宙夢と兄のペースに飲まれながらもなんとか着いていく。
『では、明日の昼時に。作戦場所はすぐに送るから』
「了解」
伊織の苦労も知らず、打ち合わせを終えた二人は連絡を切った。
「……宙夢先輩、本当に大丈夫なんですか？」
先程の連絡の内容に不安を募らせる伊織だが、宙夢はどこ知らぬ顔であくびをする。
「ふああ……。問題はない。英俊からも情報が入ってきたし、伊織がいるからね」
「……さらっと変なことを言わないでください」
宙夢に言われたことに満更そうでもない伊織。
兎に角、手は打った。スピード解決に繋がるのだろうか
。

――――――――――――――――――――――――――
ビルの上で黒いダイスを手の中で転がす青年。
その姿はソンブレロと緑と黒のチェックがバラバラに散らばったコートを羽織り、メキシコ風の衣装だ。少しばかり、いや全く日本には似合わない。
ビルの上から何も言わずに眼下を見届ける様は何かを探しているようであり、何かを監視しようとしているようだった。
「何か用事があるですか？バンクスダイスの購入者さん？」
片側だけソンブレロを上げ、帽子の下に隠した目で冷たく睨み付ける。
それに対し、バンクスダイスの購入者の男はソンブレロの男のその態度にイラッとしたのは不快な声で応じた。

「何か用事……ってアンタから呼んだよね？」
「……そんな事ありますかねェ？」
だが、全く動じずにソンブレロを戻した男とバンクスダイス購入者の間に重い空気が流れる。
「まあ、いいや。この後もやることあるから」
バンクスダイス購入者は付き合ってられないとばかりにソンブレロを被った男に背を向けてダイスを手にする。
「そうですか、お仕事頑張ってください」
帽子の下の表情は分からない。だが、言葉の端端にトゲがある。
「ッ！」
カチンときたのか、ゲノムダイスを取り出すと今にも食って掛かろうとしてくる購入者。だが、ソンブレロを被った彼は徐々にプレッシャーを強めていく。
「ダイスの使い方は購入者にお任せしていますが、我が『グロリア』に痼を残すのであればバイヤー代表として始末させていただきますのでご理解のほどを」
ソンブレロの男の発した謎の組織の名前にバンクス購入者は苦虫を噛み潰したような顔になる。
それほどソンブレロの男はその組織で強い力を持っているのだ。
「ぐぐっ……いつか、覚えておけよ」
「そのときが来ると良いのですが、ね」
これ以上釘を打たれ続ける事は自分のプライドを傷つけると悟った購入者は自らのダイスを目の前に掲げる。
「仕事をこなしてくるのを見ているといいよ！」
冷静さを欠いてはいるが、それでも自らのやり方を貫かんとする意気を軽く笑うソンブレロの男。
「……ゲノムダイスに運命を転がされないように注意してくださいね」
嫌味を捩じ込みながらじっくりと変身するのを見守るようにソンブレロを軽く上げる。
それを知ってか知らずか、ダイスの購入者は赤いコインの並んだデ

ザインのダイスの『1』の目を押し込む。それがスイッチになっていたのだ。

《クラフトアップ!・バンクス!》

低い不気味な声と共に押されたダイスが六面全て弾け飛び、購入者の周りを廻り出す。

それと同時に購入者の身体にさらに展開した六面体のパーツが組み上がっていく。

まるで身体に機械を埋め込むように。

ハズルを組み上げていくように。

人が鎧を纏うように。

身体を怪人の姿へと変貌させた。

『やっぱりゲノムダイスの力はスゴい!ハハハハハッ!』

人が変身したバンクス・アセンブルは長い舌を隣のビルの配管に巻き付け、飛び去っていった。

「………やはり適合数の低い者は心まで進水するのが関の山、ですね」

ソンブレロの男は自らのダイスをコートの中に仕舞い、退屈そうに背を伸ばした。

「………アセンブル。ダイスの中に封じられた『遺伝子』『構造』を解き放ち、人が装甲として纏った怪物。『組み上がる』と言う英語からAssemble(アセンブル)………。やはり、面白いですねェ」

アセンブルの秘密を握っている男は意味深な言葉を呟きつつも、バンクス・アセンブルの査定を開始するように飛び立った先を目を凝らしながら眺めていた――。

――――――――――――――――――――

一台の輸送車が銀行の裏手に停まっていた。

後ろの排気口から煙が上がる。出発の合図だ。

そして、緩やかに輸送車が発進する。まるで何かを引き付けるようにスピードを上げずに走る。

するとどうだろうか。影に溶けて見えないが、真上に何かが着地し、真ん中に穴がバリバリと開いていく。

見えない何かが狩りをしているようだ。
ーブウンーその僅かな揺れに反応したのか、急に輸送車がスピードを上げた。
『ッ!?』
荷台の上でバタバタと物音がする。もがきバランスを取る感覚だ。
そのまま輸送車は一気に加速し、あり得ないルートで走っていく。
『な、急にどうしたんだ?』
荷台の上で何かが叫んでいるが全く姿はない。だが、影の部分から光の当たるビルとビルの隙間を通るごとに荷台の光の反射が歪んでいるのが分かる。
何かがいるのは間違いない。そして、輸送車は一気に湾岸沿いのルートに突入し、車体を揺らし始めた。
右へ、左へ。急バンドルが荷台の何者かに強く響いていく。
『ぐううっ!』
最早荷台の何者かは、無茶無茶な輸送車のハンドルテクに振り落とされないようにすることに集中し、本来の武器である姿を隠す事に集中できなくなっていた。
光が荷台の何者かを鈍く照らす。必死に銀の舌を輸送車の中に引っ掻けているメタリックグリーンとブラックの怪人、バンクス・アセンブル。
必死に風圧に耐えるバンクスの真下、輸送車の隣にいつの間にか赤いバイクが追走していた。
「尻尾を捕まえたぜ!アセンブル!」
『な、何?』
赤い不死鳥をモチーフにしたバイクに乗っていた青年／宙夢はバンクスの姿を確認したと同時に叫んだ。
それに反応してしまったバンクス・アセンブルが顔をそちらに振ったと同時に、車体が激しくスピンした。
いや、わざとスピンさせたのだ。
ギュルルルッとタイヤと道路の摩擦が激しくぶつかり音を奏でていき、衝撃はバンクスの抵抗を跳ね返した。

『うあああああああああああっ！』
舌のロックが緩まると、豪快に振り落とされてしまったのだ。
叩きつけられたバンクスの前にバイクが停まる。
「神妙に諦めた方がいいぜ？連続強奪犯さん？」
バイクからゆっくりと降りた宙夢は胸の前に構えた右の手首に左手を添えてバンクス・アセンブルに立ち塞がった。
『ッ！警察の罠か！でも、ここでお前らを伏せればどうにでもなる！』
漸く罠と気づいたバンクス・アセンブルだがここで宙夢達を始末すれば逃れられると考え、舌を巻き付けようとした。
『お前の首をへし折ってやる！』
シュルリと光速で舌が宙夢に迫る。
だが、ふと笑いを浮かべた宙夢はバックステップで軽くその場から離れた。
「手を出すのが早いな……めんどくさい」
余裕綽々と言ったばかりに被ったままのヘルメットを投げ捨てた宙夢。
『ッ！僕の舌をかわした？お前、何者？』
宙夢の運動神経に驚きを隠せないバンクスに対し、彼は右手に持った大きめの何かを見せつける。
「俺はこう言うものさ、アセンブル君？」
『そ、それはダイス!?』
宙夢が手にしていたのはゲノムダイスよりも鮮やかな『ファントムダイス』であった。
そして、宙夢はダイスのスイッチである一の目を押し込んだ。
《Ｓｗｉｔｃｈ　ＵＰ！》
ガチャリ！ダイスはあっという間に展開し、サイコロから不死鳥の形に変形したのだ。
「お楽しみはこれからだ！」
さらに宙夢は左手に持ったバックルを腰に当てる。するとあっという間にベルトにバックルが変形したのだ。
形状は黒いスマートな形だが、中央にルーレットのような回転式の

7色にカラーリングされた歯車があり、左端にダイス装填ユニット、右側にツマミがある。下の土台には不死鳥と龍が絡み合う絵柄がある。
《マッチドライバー！トランキーロ！》
不思議な音声を鳴らすそんなベルト『マッチドライバー』を見せつけるように構える宙夢。
『そ、そのベルト!?お前は、仮面ライダー!?』
バンクスはベルトを見て宙夢の正体を理解した。
東京には噂がある。鉄の怪人を倒す仮面の騎士の噂。
その名は仮面ライダー。
「大正解。じゃ、お見せしようか。俺の戦いを！俺のレボルシオンを！」
宙夢はダイススロットにフェニックスダイスをセットした。
《Ｄａｉｓ　ｓｅｔ！フェニックス！》
ベルトの中の歯車が赤く発光すると同時にテンポの速い待機曲が流れ、宙夢の周りを不死鳥のエフェクトが渦を描く。
宙夢は左手を顔の前まで持ってきて、バンクスに甲を見せる形にした。それに合わせて指を銃を作るようにポーズを取りながらゆっくりと息を吐く。
「変身！」
変身の掛け声と同時にツマミを回した右手の甲を左手の甲に合わせて、振るように左の顔の位置まで持ってきた。
《Ｇｅｔｕｐ！灼熱のルチャドール！ブレイズ・オブ・スタイル！》
宙夢の身体にベルトから呼び出された灰色のアーマーが装填させた後、身体をフェニックスのような赤い焔が包む。
そして、それと同時に何処からともなく現れた不死鳥のエフェクトが重なり、焔が集まっていく。
『ぐっ、この炎は……』
後ずさりしたバンクス・アセンブルが見たのは赤い仮面ライダーの姿。
マスクは赤い不死鳥が羽根を広げたような形の物になり、羽根の中

心部が複眼と重なっている。頭の中心には炎型のエンブレムがある。
また灰色のボディに纏うのは赤い装甲。胸から腹部にかけて燃え上がる火柱が上下鏡のように描かれ、胸の炎は不死鳥の羽根のようになり、火と火の間に銀のラインが入っている。脚も炎型のレッグアーマーを膝下両足に纏っている。
また肩当ては左に展開したフェニックスダイスが肩当てとして装着されている。
「仮面ライダークラーロ、リングイン！さあ、楽しもうぜぇ！」
手首を返しながら仮面ライダークラーロ／宙夢は叫ぶ。
さあ、今こそ運命のゴングが鳴り響く！

Ｒｏｕｎｄ１　灼熱のルチャドール④

『仮面ライダー……何でいつも、いつも……最後に上手く……いかないんだ！もう少しで……もう少しで……！』

仮面ライダークラーロ／東賀宙夢の登場で漸く掴みかけていた欲望の光に雲が差し込んだバンクス・アセンブル。

「もう少し？んなの知らないっての」

左の手首を右手で軽く触れ、スナップさせたクラーロは間をゆっくりと取りながら、バンクス・アセンブルの動きを注視する。まずはロックアップから行くのが様子見の一手ではあるがそれでもじっくりと戦いの道筋を決めていく。

『ッ……舐めるな！』

そのゆったりとしたリズムに痺れを切らしたのか、バンクスが一気に襲いかかってきた。

「フッ」

漸く戦いが動き出したと同時にバンクスと組み合ったクラーロ。

『グッ……押されている……』

クラーロとバンクス・アセンブルとが組み合った途端、重心を低く力比べになるがテコの入れ方の巧さに勝るクラーロがじりじりと押していく。

『付き合ってられるか！』

だが、その組み合いを嫌ったのかバンクスが手を離す。

「情けないなッ！」

手を離したのを見計らってなのか、クラーロは右手を掴むとバンクスを捻って投げる。

『おあっ!?』

いきなりに投げられ、そのまま腰を落としたバンクス。クラーロはその反動を利用し、側転で微妙に距離を取り左の側頭部をターゲットに捕らえた。

「そらッ！」

そして繰り出したのはその場飛びのドロップキックだ。グジャッ

とえげつない角度で首に衝撃が走ったバンクス・アセンブル。
『な、ぐはっ！っっ!?』
痛みで言葉が繋がらず、首を押さえながらゴロゴロと吹っ飛ばされる。
「ま、挨拶代わりはこんなものかな」
涼しい声で着地して見せたクラーロと対照的にいきなり一撃を貰ったバンクス。
『ぐっ、こんな事でやられてたまるか！』
頭を振り、衝撃をごまかしたバンクス。何も考えられずに再びクラーロへと突撃する。
「なってない、なってない。見世物にもならない酷い手だてだ……。俺がしっかり引き立ててやるよ」
明らかに余裕綽々になったクラーロは突撃してきたバンクス・アセンブルに合わせるように走っていく。
ガッとバンクス・アセンブルとクラーロは再びぶつかろうとした瞬間だ。
足が微かに払われた感覚と同時にふわりとバンクスの身体が浮き、クラーロの『宙返り』に巻き込まれていたのだ。そして、そのまま背中から地面に叩きつけられた。
『ガハッ！な、なんで？』
攻撃に打って出たはずの展開だった。だが、実際には返す刀で投げ技を食らわされたのだ。
何が起きたかなんて分かるはずもない。これぞプロレス技の１つである『スパニッシュフライ』だ。
大技を決めたはずのクラーロも淡々と着地し、バンクスを掴みあげた。
「そらっ！おらっ！とりゃッ！」
容赦のないリズムで両腰にミドルキック、回転しての回し蹴り、逆回転での後ろ蹴り。さらに再び回って顎に片足を伸ばして踵で蹴りあげるトラースキックへと繋げていく。
最後はその場で飛び、凪ぎ払う形での延髄蹴りだ。この鮮やかな流

れにバンクス・アセンブルの足元はおぼつかない。
『あぐ……。く、クソ……。なんて見境無いんだ……』
だが、フラフラとした足取りではあるがバンクス・アセンブルの声にはまだ欲望への執着があった。
『終われない、終われないッ！』
スウッと近くの橋の影に入ると体色を灰色に変化させるバンクス。
「お、得意のムーブに入ったか。だが……」
逃げられそうにも関わらずクラーロは余裕の構えを崩さない。それもそのはず。ー既に勝負手は決まっているのだから。
「……さあて、と……」
クラーロが走り出したのは橋とは真逆の方角。そこには先程の輸送車が停まっていたのだ。
真っ直ぐに鋭い走りで輸送車の車体めがけて行く。
「ハッ！」
車体のすぐ近くまで来ると、足に炎を纏わせたクラーロ。見計らっていたように車体のガソリン口を蹴り抜いたのだ。そして、華麗に荷台を踏み越えムーンサルトで橋の近くに着地した。
もちろん炎で蹴り破ればどうなるかは分かる。
ガガガン！大きな衝撃と共に輸送車が熱波と共に吹き飛んだのだ。
もちろんその爆発は並みでなく、爆風と共に熱波は橋まで届いた。
『あ、あ、熱いッ!?無茶苦茶だあああああっ!?』
すると、その熱波によって影の一部にパールのような輝きが見えたのと同時にバンクス・アセンブルの姿が露になったのだ。
『な、何で姿が……』
熱波に気を取られていたバンクス・アセンブルは漸く自分の身体が変色しているのに気がついた。
「知らなかったのか?カメレオンは周りの色に姿を合わせる事は出来る。だけど、周りの環境で『色が変わる』んだよ」
クラーロは慌てているバンクスに告げる。カメレオンの特徴を。
カメレオンは周りの環境に色を合わせる事が出来るのは有名な話だ。

だが実はカメレオンは光によって色が変わり、体温によっても色が変わる細胞を持っているのだ。
つまり、クラーロが輸送車を爆破した理由は熱波によってバンクスの身体の色を変化させるのが目的だったのだ。
『く、ぐうっ！』
最早バンクス・アセンブルに逃げる術はない。
『こうなったら……ままよ！』
最後の手札とばかりに舌を伸ばし、クラーロを捕らえようとするがすぐさま舌をキャッチされてしまう。
「そろそろ仕上げといきますか……」
グイッと舌を引っ張り、バンクスを引き寄せるクラーロ。
『あががっ！』
あっという間にクラーロの手の届く範囲内に引き寄せられたバンクス・アセンブルは必死にもがく。
逃げられない、逃がさない。しっかりと懐に潜り込んだクラーロはバンクス・アセンブルの腕の間に手を潜り込ませた。
その体勢は羽交い締めのようだ。そのまま身体を後ろに素早く剃らせていくクラーロ。これもプロレス技の1つ。ジャーマンスープレックスだ。
そのままホールドを解かずに再び体勢を作り、2発目。
「もう一丁！」
おかわり3発目。と、小気味良くジャーマンスープレックスを繰り出し、バンクス・アセンブルの戦意を削り取っていく。
『……ぐ、ぐ……』
ここまで豪快な技と、確実にダメージを積み重ねる蹴りを喰らい体力を削り取られたバンクス。
「さあ、これでフィニッシュだ！」
ジャーマンスープレックスの形を解き、距離を取るクラーロはベルトのツマミに手を伸ばした。
ツマミを回転させると、ベルトの中のルーレットギアが激しく回転する。

七色の光を放ち、１周。
次に七色の光から赤と緑の２色に変化する。
そして、３周目は赤のみに激しく発光する。
そして、ベルトが叫ぶ。
《Ｆｉｎｉｓｈ　ｈｏｌｄ！》と。
「ハアアアアアアアアアアアッ……」
低く腰を下ろし、タメを作っていくクラーロの足から煙が立ち上がり、熱気が渦巻いていく。大気中の熱を吸い取るかのように熱気がクラーロを包み込む。
すると、炎をたぎらせた不死鳥が翼を広げたエフェクトが浮かび上がるとクラーロの足が燃え盛る。
「ダアッ！」
それを待っていたかのように羽を広げた不死鳥と共にクラーロがムーンサルトの軌道で舞い上がったのだ。
『く、来るな！や、やめろ!?』
射程圏内にバンクス・アセンブルを捕らえている事と、バンクス自体のダメージが限界なのもあり必死に叫ぶが、そんなのはお構い無し。
「……ハアアアッ！」
ムーンサルトのスピードでバンクスの頭に踵が突き刺さる。
『がああああああっ!?』
一撃の重さでグラリと脳が揺れ、意識が吹き飛ぶ。
「これで……終わりだ！フレイアベンダバール！」
そして、踵落としの反動で再び飛び上がったクラーロは翼を回転させる不死鳥のエフェクトと共に炎を纏った回転真空蹴りを繰り出し、バンクスの身体を弾き飛ばした。
これこそ必殺のフェイバリットホールド『フレイアベンダバール』だ。
直訳すると、炎の嵐。嵐の名に恥じない凄まじい一撃だ。
その威力で軽々と横たわった輸送車まで吹き飛んだバンクス・アセンブルの身体にはヒビが入っていた。

『こんな、ところで、終わりたくな………い………』
前のめりに倒れたと同時に爆発に呑まれたバンクス。
「いや、どちらにしろ………スリーカウントにはなっていたぜ」
クラーロは爆発の煙の跡にバンクスダイスの購入者と、粉々になったダイスを確認すると気絶した購入者を掴むとその場から離れた。
あとは、彼を正道につき出すだけだからー。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日、東彩大学のキャンパス内にある研究室。
「お疲れ様」
そっぽを向いた宙夢に英俊がコーヒーを置いた。
「お疲れ様じゃねえよ………。そっちは情報を流しただけじゃないか………。ま、バンクスの能力のヒントになる情報で幾分か助かったけどな!」
そっぽを向いたまま正直に応じない宙夢。
英俊はそんな宙夢の対応にらしいと微笑んだ。
「それにしてもまた引っ張り出した、伊織との約束はどうしたの？」
英俊の質問に宙夢の顔色が変わる。
「………不味い！約束があった！ま、また来るからなッ！」
慌てて研究室を後にした宙夢を英俊は見送った。
東賀宙夢／仮面ライダークラーロの締まらないながらも始まりの物語。
さあ、楽しもうぜ！

Ｒｏｕｎｄ２　咎人は焔に、狼牙は月に

「斯くして東賀宙夢、仮面ライダークラーロの物語は静かに、しかしながら華々しく幕を開けたと言う訳……かな」

どこかの書斎で乱雑に散りばめられた背表紙の無い本を手にした男が呟く。収集者たり語り部たる彼、早瀬文臣は本を静かに棚に戻し近くの台に腰かける。

「さて、次の話に入る前に小話をしよう。今、この書斎にはありとあらゆる世界の物語が集まっている、となれば同じ世界でもあらゆる可能性のｉｆが連なった幾多のスピンオフがあるに違いない。でもそれはｉｆであり、ないかもしれない。でもそれはある。あらゆる可能性があるからね。意味もない小話だよ、これは」

満足げに文臣は笑うと、口を再び動かす。

「そう。あらゆる可能性があるなら今度のお話だってあらゆる可能性がある。突然人体が発火すると言う現象、つまり不可思議な出来事」

―それは科学の可能性、トリックを使った可能性、心霊の可能性だってある。ならその可能性に超越した力をもつ怪物によるケースだってあるかもしれないしね―

本棚から響くもう一人の文臣の声。

「おっと、失礼。この話は……これからだった、ね。じゃあ、この辺で」

語り部は指をならす。すると、文臣の身体は一瞬で炎に包まれ消えていった。

残った炎の向こうには再びクラーロの世界が写っていた―。

―２３時２６分、港区―

東京タワーのネオンが遠目に見える港区の暗い坂。

今夜は月も星も見えないほどに雲が空を覆い、街頭の灯りだけがその公園を照らしていた。

「だからよ、盛り上がらねえからよ！打ち上げてやろーぜ！」
どこぞのフリーターか、金髪の若者3人が近所の迷惑なども知らずに騒いでいた。季節外れの花火をわざわざやっている姿は滑稽であり、逆に人を近寄らせない空気を醸し出していた。
「おおー！やっぱ花火は冬だな！」
「馬鹿かよ、夏だろ！ま、関係ねえし！」
赤い髪の若者とパーカー姿の若者か掛け合うなか、リーダー格の若者が新しい花火に火をつけようとした。
―そんなに火が好きか？―
「……おい、なんか聞こえなかったか？」
「あ、何？」
「いや、火が好きか……とか……」
「何言ってんの？そんな事喋ってないし」
「そ、そうか……」
リーダー格の耳に入ってきた静かで、憎悪を孕んだ声色。思わず他の二人に聞き返したが耳には届いていないようだ。
おどろ恐ろしいその声色、まるで彼にだけ問い掛けるように。
（まさか……あの事じゃないよな？いや、あれは……アイツらが悪いんだ、俺は唆されただけだ……うん、悪くない……悪くない）
何か思い当たる節があるのか、ライターの手を止めたリーダーは何度も頭のなかで言い聞かす。
（……そうだ、そう……忘れ……）
花火の導火線にライターを近づけ、降りきるように着火させようと親指を動かしたーー。
『やっぱり、アイツらの一味か。その顔覚えてるよ？』
耳元で誰かが囁いた。憎悪と嘆きに満ちた、恨みを。
「ヒイッ!?」
耳元の声が神経を凍らせ、リーダーは飛び出てきそうな声を精一杯隠し、背筋を伸ばした。
「おい……どうした？……」

「……光？」
二人が異変を訝しげに見ていたと同時に三人の前に妖しく光る高原が浮かび上がった。
青に、赤に、黄色に三原色に発光する何かがふわりと降り立つと光が形をはっきりと現していく。
それは光であり、光でない。
簡単に言うなら『蛍』だ。蛍の光の中に奇怪な存在があった。
蛍とバーナーを掛け合わせたような怪人だ。
「うあああああああああっ!?」
「ば、ハケモノ!?」
逃げようとしながらも思わずスマホに手を伸ばしてしまう若者達。
悲しいかな、情報社会のもたらす自己承認欲が彼らの判断力を鈍らせたのだ。
「……あ、あ、俺は……悪くない……」
リーダーはと言えばその場にへたれこみ全く動けなかった。罪で足を縛られたように、その場から動けなくなってしまったのだ。
『泣き言はあの世でいいな。お前らもコイツとつるんでいるなら先に始末しないとなーー。犯罪者を出さないために、なッ！』
蛍の尾が一瞬閃光のように光る。その光は一瞬で消えたが凄まじい熱量を周囲に撒き散らした。
それはどういう事か？
「……アアアアアアアアアアアアアアッ!!」
「あ、熱いィィィィィッ！た、助けて！」
三人の若者は炎に包まれのたうち回る。
周囲には肉や脂肪の焼ける胸焼けする臭いが漂い、三つの火が公園に残されるだけであった。
無論、大きな騒ぎになったのは分かりきった事だった。

ー翌日ー

周囲をブルーシートで囲われた現場に慌ただしくパトカーが何台もやってきては警官達が出入りを繰り返していた。
そんな中に場違いなスーツ姿の大学教授がいた。
「すいません、警部さんに呼ばれました」
「英俊先生、お疲れさまです！」
警官達と会話を交わしながらブルーシートの前までするりとやってきたのは英俊だ。
『フィールドワーク』のために呼ばれたようで軽く会釈をしながらもあっという間に現場に潜り込んでいく。
「……うっ……」
流石に英俊も残った臭いに顔を歪ませる。それほどまでに激しく人柱は燃え盛ったのだ。
「東賀さんはどちらに？」
「宙夢は今、研究室に……」
ブルーシートに入る間際にそんな話をしながら、英俊は姿を中へと移した。
「ん？」
だが、その一瞬の時に英俊は見た。
殺害現場を静かに写真に納めるダメージジーンズとキャップがミスマッチを起こさせる男が野次馬の中にいたのを。
何故、写真を？疑問に思ったがブルーシートに姿を隠したのと同時に疑問も途絶えた。事件が目の前にあったからだ。
さて、そのキャップを被った不思議な青年は深く帽子を被り、小さく呟いた。
「お手並み拝見、もう一人の仮面ライダー……さん？」
と。